資料１

写

平成２５年４月２４日

別海町文化財保護審議会　会長　様

別海町教育委員会
教育委員長　大塚　保男

別海町文化財保護条例に基づく町指定文化財の指定について（諮問）

別海町文化財保護条例第５条第１項に規定する町指定文化財の指定について、同条例第４条第１項及び別海町文化財保護審議会規則第２条に基づき、下記１件について諮問します。

記

別海町指定文化財候補

（１）種　別　有形文化財

（２）名　称　旧柏野尋常小学校奉安殿

（きゅうかしわのじんじょうしょうがっこうほうあんでん）

（３）員　数　１棟

（４）所有者　別海町

（５）所在地　別海町西春別 105 番地 11

（６）概　要　別紙のとおり

町指定文化財候補物件の概要

1　旧柏野尋常小学校奉安殿　（有形文化財）

所在地　別海町西春別 105 番地 11
所有者　別海町
員　数　1 棟
大きさ　間口 2.4 メートル、奥行 2.5 メートル、高さ 3.3 メートル

本物件は、旧柏野尋常小学校敷地内に設置された奉安殿である。奉安殿とは、明治以降、学校に下賜された天皇・皇后の御真影（写真）や教育勅語謄本を納めていた建物のことで、戦後その多くは文部省の命令などにより撤去された。

柏野尋常小学校に奉安殿が作られたのは 1937（昭和 12）年 10 月 5 日で、建設費 700 円のうち、柏野部落からの寄附が 350 円であった。翌年 10 月 30 日に同校に御真影が下賜されて奉安殿に納められている。

1944（昭和 19）年、計根別飛行場の建設によって開進国民学校が閉校し、大成小学校が新設されることに伴い、柏野国民学校も大成小学校に吸収されて閉校することとなった。御真影は大成小学校に奉遷されたが、奉安殿は地元の神社本殿として使われることとなり、その後の撤去命令の対象外となったことから、現在に至るまで残っていると考えられる。

本奉安殿は、火事や自然災害から御真影を守る目的から、モルタルなどを用いて比較的頑丈に作られているが、現在は破損が進んでいる。また、奉安殿周囲には鉄柵と鉄製の門扉が設置されていたが、破損が著しい。奉安殿内部には、御真影などを納めておく棚が現存する。

戦後に破壊指令が出たことから、奉安殿が現在も残っていることは稀であり、町内に現存する奉安殿は本物件以外には確認されていない。また、道内で確認されているのも 40 棟程度である。

以上のように本物件は、戦前の小学校で実施されていた教育を物語る極めて重要な歴史遺産である。

資料　旧柏野尋常小学校奉安殿について

奉安殿（ほうあんでん）とは

奉安殿とは学校に下賜された「御真影（ごしんえい～天皇や皇后の写真）」や教育勅語などを安置する建物のことである。御真影は当初校舎内の奉安所に安置されていたが、学校の火事に際して御真影を守って校長が焼死する事件も起こるなかで、校舎から離れた地点に堅固な奉安殿を建設し、御真影を安置することが大正期以降顕著となった。奉安殿の建設は昭和 10 年以降全国的に実施され、国民精神総動員運動と連動した形で登下校時の奉安殿への最敬礼が一般化し、「御真影」はますます神格視された。敗戦後、文部省の命令（昭和 21 年 6 月 29 日次官通牒）などによって奉安殿は全面撤去され、「御真影」は焼却された。

柏野尋常小学校について

柏野尋常小学校は、1929（昭和 4）年に「西別小学校附属上春別第四特別教授場」として開校、児童数は 134 名であった。1931（昭和 6）年に柏野尋常小学校に改称、1941（昭和 16）年に柏野国民学校に改称した。

学校名は、山口英司校長が「柏の木の沢山ある原野に建っているところから」名づけた。[1] 1944（昭和 19）年、計根別第三飛行場の建設のため、開進国民学校の移転が強要されると、柏野国民学校も「巻ぞい」になり、両校は解体されて大成国民学校となった。

写真 1　柏野尋常小学校（昭和 12 年）

現在校舎のあった場所には柏野会館があり、1937（昭和 12）年に柏野青年団が寄贈した小学校校門の一部が現存している。

旧柏野尋常小学校奉安殿の歴史

柏野尋常小学校の奉安殿は、1937（昭和 12）年 10 月 5 日に竣工した。建築費は 700 円[2]で、そのうち 350 円は柏野地区からの寄付によって賄われた。竣工当時の写真が残っているが、この写真から当時の柏野地区の人たちが、奉安殿建築作業にも従事していたことが窺える。

奉安殿建設の契機は、天皇の北海道行幸であった。1936（昭和 11）年秋、天皇は石狩平野での

写真 2　柏野奉安殿（昭和 12 年撮影）

1　『記念誌』84 頁。

2　当時白米 1 俵 12 円 45 銭、2 歳馬 1 頭 100 円であった。『記念誌』51 頁。

陸軍特別大演習に前後して、道内各地を行幸した。9 月 28 日は根室を訪れているが、その際当時の柏野尋常小学校長植木壽久は、厚床駅で「聖駕奉拝」のため、すなわち天皇の乗った特別列車を見送るために厚床に出張している。また 9 月 29 日の帯広飛行場での御親閲には、同校訓導小田中一治（訓導は現在の正教諭）が同校青年学校生を引率し、受閲した。天皇が函館の柏野練兵場（現函館競馬場）で御親閲して北海道を去った日である 10 月 10 日には、同校で奉迎式を挙行し、部落住民が多数参列した[3]。その時の記念事業として奉安殿建築が決議され、保護者会で寄付募集が開始されたのである。

こうして完成した奉安殿であったが、肝心の御真影が下賜されたのは、完成から 1 年後の 1938（昭和 13）年 10 月 30 日のことであった。天皇と皇后の御真影が下賜されたこの日は、開校記念日と並んで柏野尋常小学校の記念日となった。

北海道綴方教育連盟事件

僅か 15 年の柏野尋常小学校の歴史に暗い影を落としているのが、北海道綴方教育連盟事件である。北海道綴方教育連盟は 1935（昭和 10）年に結成されたが、型にはまった作文ではなく、子どもたちにあるがままの生活を綴らせる生活綴方教育の実践が「プロレタリヤの階級意識を培育」しているなどとして、1940（昭和 15）年 11 月にまず 3 人が、翌年 1 月 10 日に 50 人を超える教師たちが治安維持法違反で逮捕された。当時柏野尋常小学校の校長であった小田中一治も逮捕された一人であった。昭和 18 年 6 月 30 日、小田中元校長に懲役 1 年（執行猶予 3 年）が言い渡された。戦後、小田中は木材関係の仕事に就いたという。

小田中校長が校長であった昭和 14 ～ 15 年度の学校沿革誌は失われており、昭和 16 年度から 19 年度の沿革誌の記述はそれまでと比較すると極めて簡略である。この事件が柏野尋常小学校に、そして地元住民に与えた衝撃を暗に物語っているかのようである。

奉安殿の現状について

戦後の撤去命令にもかかわらず柏野の奉安殿が現存しているのは、上述のように昭和 19 年の時点で柏野国民学校は存在せず、同年に奉安殿を柏野神社としたため、戦後に撤去の対象とはならずに現在まで残っていると推測される[4]。

コンクリート製の建造物であるが、建設から 70 年以上を経過して破損が進んでいる。また奉安殿周囲にあった鉄柵と門扉は半壊状態である。

写真 3　現在の旧柏野尋常小学校奉安殿

奉安殿内部には、当時教育勅語や御真影を入れていたと思われる観音開きの棚があり、菊の紋章もあることから、これは 1934（昭和 9）

3　敢えて天皇が北海道を離れる日に奉迎式を行ったのは、偶然同じ「柏野」の名のつく場所での御親閲があったからではないかとも考えられる。

4　柏野国民学校の御真影は、1944（昭和 19）年 11 月 2 日、大成国民学校に「奉遷」された。

年 5 月 1 日に柏野尋常小学校に納入された「勅語奉蔵棚」である可能性がある。

1980（昭和 55）年に奉安殿の隣に神社が新築されて、鳥居も新しい神社の前に移されているが、現在も奉安殿内には、神社関係の物が一部置かれている。

写真 4 奉安殿内部の棚

旧柏野尋常小学校奉安殿の歴史的価値

戦後に破壊指令が出たことから、奉安殿が現在まで残っていることは稀であり、町内に残っていることが確認されているのはこの柏野の奉安殿だけである。また、道内においても現存が確認されているのは僅か 36 棟である[5]。

以上述べてきたように、本物件は柏野尋常小学校の歴史を物語るだけではなく、わが国の戦前教育の歴史にとっても極めて重要かつ貴重な歴史遺産であるといえる。

主要参考文献

①.『柏野尋常小学校沿革誌』（上西春別小学校所蔵）

②.『大成小学校沿革誌（1)』（上西春別小学校所蔵）

③.『帯広市史』（1984 年）

④. 小野雅章「御真影・奉安殿の戦後「改革」―戦後教育改革における天皇制の転成―」『教育学研究』第 57 巻第 4 号（1990 年)、10 ～ 18 頁。

⑤. 小野雅章「御真影神格化の過程―「奉護」施設の変遷を中心に―」『日本の教育史学』第 34 集（1991 年)、66 ～ 81 頁。

⑥. 柏野開拓五十周年記念事業実行委員会『柏野開拓五十周年記念誌』（1978 年）

⑦. 関川修司「忘れ去られた建物～奉安殿～」一般財団法人北海道建築指導センター『センターリポート』第 184 号（2013 年)、28 ～ 29 頁。

⑧. 平澤是曠『弾圧　北海道綴方教育連盟事件』（北海道新聞社、1990 年）

⑨. 山田雅也「戦前・戦中の風景／北海道の奉安殿」『北海道の文化』82 号（2010 年)、32 ～ 35 頁

5　山田雅也氏と関川修司の奉安殿現存調査による。

旧柏野尋常小学校奉安殿関連年表

年	元号	月日	できごと	出典
1925	大正 14	4 月 22 日	治安維持法公布	
1929	昭和 4	5 月 28 日	西別小学校附属上春別第四特別教授場を上春別原野 59 線南 5 番地に開校。入学児童 134 名。	①
1929		9 月 8 日	上春別小学校附属になる	①
1930	昭和 5	5 月 3 日	上春別第二尋常小学校と改称	①
1931	昭和 6	3 月 9 日	教育勅語下賜	①
1931	昭和 6	3 月 26 日	柏野尋常小学校と改称	①
1932	昭和 7	2 月 11 日	青年団発団式挙行	①
1932	昭和 7	6 月 29 日	降霜で「被害甚大」「各作物回復ノ見込ナシ」「放棄シテ出稼セルモノ多シ」	①
1932	昭和 7	9 月 11 日	柏野小学校で農民大会が開かれる	①
1934	昭和 9	4 月 1 日	小田中訓導に任命	①
		5 月 1 日	勅語奉蔵棚到着、直ちに奉蔵する。	①
		9 月 3 日	小田中訓導着任	①
1935	昭和 10	4 月 1 日	青年学校令施行・公布	
		8 月 7 日	北海道綴方教育連盟結成	⑧ 103
1936	昭和 11	9 月 24 日	北海道行幸のため天皇が横須賀港より出発	③ 293
		9 月 26 日	行幸御安泰祈願祭実施	①
		9 月 27 日	植木校長「聖駕奉拝」のため厚床に出張	①
		9 月 28 日	天皇、釧路を発ち根室町へ。その日のうちに釧路に戻る。	③ 293
			小田中訓導が青学生 (青年学校生徒) を引率して帯広市に御親閲受閲のため出張	①
		9 月 29 日	天皇、帯広駅に到着。帯広飛行場で御親閲。約 2 万人の団体が行事を拝観。	③ 294
		10 月 10 日	天皇、函館柏野練兵場(現競馬場)で御親閲。行幸を終え横須賀軍港に戻る。	③ 296
			奉迎式挙行。部落民多数参列。記念事業として奉安殿建築を決議、保護者会で寄付募集を開始する。	①
1937	昭和 12	7 月 7 日	盧溝橋事件	
		9 月 25 日	御真影奉安殿建築工事着手	①
		10 月 5 日	奉安殿竣工。工費 700 円、うち 350 円部落寄付。	①

年	元号	月日	できごと	出典
		10 月 13 日	国民精神総動員週間実施	①
		11 月 5 日	小学校の門柱建立（柏野男子青年団が寄贈）	①
1938	昭和 13	10 月 30 日	御真影下賜。夜には奉祝会開催。	①
1939	昭和 14	4 月 30 日	小田中訓導が校長を兼任	①
1940	昭和 15	11 月 20 日	綴方教育連盟の坂本らが検挙	⑧ 13
1941	昭和 16	1 月 1 日	元旦の式後、小田中校長と「長い別れになった」（綴方教育連盟事件）	⑥ 27
		1 月 10 日	「綴方教育連盟事件」で 50 人を超える教師が検挙	⑧ 13
1941		4 月 1 日	柏野国民学校と改称	⑥ 37
		4 月 30 日	小田中校長退職	①
	昭和 18	6 月 30 日	小田中に懲役 1 年（執行猶予 3 年）が言い渡される。	⑧ 27
1944	昭和 19	4 月 1 日	開進国民学校との合併が決定	⑥ 37
1944		10 月 1 日	柏野、開進の両校が合併し大成国民学校となる	⑥ 37
		11 月 2 日	柏野国民学校の御真影が大成国民学校に「奉遷」	②
1944			「柏野神社を奉安殿に奉る」	⑥ 27
1948	昭和 23		柏野小学校跡に会館を建設	⑥ 28

資料２

別海町歴史文化遺産認定物件

１．旧西別神社祠（きゅうにしべつじんじゃほこら）

旧西別神社祠は、1928（昭和 3）年に現在の別海神社の位置に建立された西別神社の祠である。西別神社の起源、その変遷には諸説あるが、西別神社が現在地に移って以来現在に至るまで現存する、西別神社・別海神社の歴史において最古の建造物である。

昭和天皇即位記念事業として、小林熊次郎らが呼びかけ人となり、氏子 100 世帯余りより浄財を募って、1928（昭和 3）年 9 月 13 日に建立された。建築様式は流造りで、材にはナラが用いられている。別海神社の越智宮司によると、1934（昭和 9）年に作られた西別神社よりも高度な技術が駆使されている。

本祠は昭和 9 年に建造された西別神社の本殿として鞘掛けされたため、1978（昭和 53）年に現在の神社が改築（新築）されるまでは、いわば室内保存されていた状態であった。このため保存状態がよかったが、境内の忠魂碑横に移設されたため野ざらしとなったことから、昭和 59 年には篤志家より総工費の半分の寄付を受けて、銅板の屋根を掛ける工事を行い、保存措置が取られた。

大きさは間口約 170cm、奥行約 230cm、高さ約 250cm である。

以上のように本物件は、別海村の中心地「西別」として大きく発展し始めた創生期の西別を今に伝えてくれる貴重な歴史遺産である。

2．西別神社々誌（にしべつじんじゃしゃし）

西別神社々誌は、昭和 9 年 10 月 31 日の西別神社竣工時に奉納された、一枚板に墨で書かれた神社誌であり、1978（昭和 53）年の西別神社改築（新築）時に発見された。この社誌には、西別神社の由来・歴史はもちろん、当時の西別市街にあった主要な公共機関や寺・商店などの名称、氏子総代人と西別神社を建築した棟梁の住所・氏名などが列挙され、さらには当時の物価や農作物の作況、別海村が畑作から牧畜に転換し始めた時の乳価までも記されている。

神社の社誌が 1 枚の板に書かれている例は少ないと思われるが、おそらく棟札を兼ねて神社の屋根裏に納められたと考えられる。大きさは縦約 24cm、横約 180cm で、元々このために板を用意したのではなく、神社の建築資材としてあったものを流用したのではないかと推測される。

今は町の名前としては失われてしまった「西別」であるが、その後の別海村の中心地として栄えた「西別」の歴史を物語る貴重な歴史遺産であり、文書資料としての価値も高い。